



# 丸屋



こんにやく

丸屋、というとクラス中だけじゃなくおそらく学校中がいい顔をしない問題児だ。

出席日数稼ぎのためだけに学校にくる彼は、週に二、三回教室に顔を出すけれど、彼がそこにいる日はきまって教室内がなんともいえない緊張感みたいなものを抱く。皆が皆、彼を腫れ物扱いしているせいかもしれないし、そもそも彼自身が、誰ともコミュニケーションをとろうともせずに、むしろそれを拒否するようにふるまっていた。ただそれを教師が何もいえず、軽くしか諷められないのは、一部のうわさでは彼がかなりの秀才だからだという。本当かどうかはまったく誰もわからない。

夏休みも間近に迫ったある日、俺は久しぶりに寝坊というものをして学校までの道を、自転車をかなりすっとばしていた。汗がしたたりおちてシャツにくっつくのも気持ち悪かったけれど、担任のねちっこい小言を聞くことを想像するのも気持ち悪かったし、少なからずとも女子がいる前でなんだかんだと言われるのは恥ずかしい。とにかくこいで、こいで、こぎまくった。

乾いた汗が気化熱をおこして、熱を奪っていくのが気持ちがいい。蝉の大合唱の中を歩いていくのは、ずいぶん青春くさかった。いつもなら通学する生徒でにぎわう学校までの一本道に差し掛かった。全速力でかけぬける。

俺の走る道と、学校の前で垂直に交わる道路があって、本来なら一旦停止せねばならない。わかってた。だけど遅刻のほう俺にとっては一大事だ。戸惑うこともなく、もう一漕ぎしたときだった。

一瞬間、右目の端に鮮やかなオレンジ色の髪の毛が映ったが、それが丸屋だと気づいたときにはもうとまれず、鈍い衝撃とともに、俺はアスファルトに投げ出された。

「本当、ごめん」

病院から出たところで、俺はどぎまぎしながら丸屋にそう言った。彼は松葉杖をつきながらふらふらとしている。オレンジ色の髪の毛は目まで覆い隠しているから、表情はよくわからない。そうか、目は口ほどにものを言うというけれど、本当だ、などとくだらないことを思う。

「いいよ、別に。骨が折れてるわけじゃなかったし」

「いやでも、夏休みはじまるのに」

「関係ないから、俺には」

目は見えないが、きっと丸屋は無表情なのだろう。まるで棒読みみたいに、彼は言葉を口にだす。しゃべっている、という感じではなかった。ただ、言わなければいけないから口にだす。そういう。

おけがわ  
「桶川はこのまま学校だ。丸屋は帰っていいからな、送るぞ」

自転車の俺とぶつかった丸屋は、左足のひざをおもいきりすりむいた。かなりの血がでていたし、骨は出ていなくて骨折もしていなかったが、病院では包帯をまかれ松葉杖をつくことになった。俺はひじと頬を吊り向いて、右の額にたんこぶしげうこができたぐらいだ。

保健室に行く途中で、たまたま担任の芝浦しばつぽに会ったから、芝浦が病院まで車を出してくれた。丸屋は頷くこともしないで、俺を追い抜かして車に乗り込む。黙って後に続いた。

「俺、学校で下りる」

俺たちが事故った道路にさしかかったとき、丸屋はそう言った。先生は丸屋を家まで送ったあとに学校にもどろうと思っていたらしく、丸屋のその言葉で少し振り向いた。俺も、助手席に座っていたので振り向いた。

「何言ってるんだ。お前、その足じゃ歩くのも大変だろ」

「歩ける。それに、もう学校だろ。いいんだよ、学校で下ろせよ」

「お前な、教師に向かってその口の利き方はなんだ」

「いいから、下ろせよ」

芝浦の言い方も、丸屋の言い方もまるで怒気を含んでおらず、だが丸屋は頑なだった。最後には芝浦が折れた。

校門前で、丸屋は松葉杖と自分のかばんをもって降りた。俺はこのまま見送ってもいいものか逡巡していたが、ついには口に出せず、よろよろと去っていく丸屋の後姿とオレンジの頭を眺めていた。

「先生」

彼を見送ったあと、学校の駐車場に車を止める。車から降りると上からの直射日光と、下からの照り返しですぐに汗が噴出す。芝浦もその暑さに顔をしかめながらこちらを向く。

「丸屋の家ってどこらへん？」

「あー、あれだ、生徒のこじんじょうほうのろうえいをふせがねばならん」

「なに、今ぜってえ言えてないよ。全部ひらがなみたいな言い方だった」

「あのな、お前は加害者なんだぞ。まったく、遅刻だし、最悪だな。カミナリ落ちるぞ」

「誰から」

「お前の母さん」

「先生じゃないのかよ」

「俺に怒るなんてものは向いてない」

「先生」

職員室に向かって歩き出す芝浦のあとに続く。その背中には汗が染みていた。きっと俺もしみている。屋の背中にだって染みているかもしれない、と思うと急に不安になった。

「丸屋の足、腐らないかな」

「ああ？」

芝浦は驚いたように振り向いた。

「だって、この暑さだろ、なんか腐ったら俺マジでどうしよう」

「お前な、高二にもなってその考え方してるから彼女ができないんだよ」

「関係ねえよ」

げらげらと笑われて、丸屋のことは気にしなければいい、と半ば無理やり思う。

「え、丸屋くんと事故ったの」

「うん、ぶつかった」

終業式の朝、隣の席のヒロミにその話をした。あの日以来、丸屋は一度も学校に来てない。さすがに心配だが、家もわからないし連絡先もわからない。クラス中に聞いてみたものの、誰もしなかった。ヒロミは興味があるのかないのか、マニキュアを塗りながら横目で俺の話を聞いている。

「超怖い。殴られたりしなかったの？」

「いや、まったく。俺も絶対なぐられると思ったけどな」

「わかんないよ、家帰ったら玄関先にいたりしてさ」

「やめろよ、鳥肌たつ」

ヒロミはけらけら笑って、爪にふうと息を吐いた。オレンジ色のマニキュア。学校で塗るなよ、と突っ込むと、今日は午後からデートだもん、とかわいこぶってみせる。いないくせに、とさらに言うと、お前に言われたくない、と頭を叩かれた。じゃあ、俺が彼氏になってやろうか、などとは口が裂けてもいえない。ヘタレな俺。

「あ」

ヒロミが真顔になった。どうやら俺の後ろのドアから誰かが入って着たらしい。振り向くと、オレンジ色の頭の彼だった。松葉杖をついて、体を左側に傾けて一珍しくかばんが重そうに見えた一静かに入ってきた。

「……おは、よう」

中途半端に裏返った声が俺の咽喉を押し広げるみたいに出てきた。丸屋はふいと顔をあげ、視線はもちろんみえないがおそらくこっちを見たのだろう、かすかに頷くみたいにして松葉杖をつく。彼の席はグラウンド側の一番後ろの席。かばんが重いのかけだるいのか、彼の歩みはずいぶん遅い。足が痛いのもかもしれない。カツン、ガシャン、と松葉杖が床をたたく音とかばんがゆれる音が交互にする。誰もが黙ってじっと見ていた。ヒロミも手のひらを広げて机についたまま、首だけを動かして丸屋の歩くさまを見つめている。

「丸屋」

あまりにも進みが遅くて、きっと彼は望んでいないのだろうとなんとなく思いながらもかばんを支えた。丸屋は驚いたようにこちらを見る。前髪がゆれて、初めてしっかりと目があった。目つきが悪いわけじゃなく、普通の顔だった。

「手伝うよ。俺の責任だし、悪かったよ」

「触んな」

「いいよ、体傾いてるよ」

「うるせえな」

丸屋が腕をつっぱねて、松葉杖と俺と一緒に倒れた。たいした音もしなかったが、誰もが知っている。かあっと体が熱くなる。彼はゆっくりとしゃがんで、松葉杖を拾いなおし俺のことは無視をしてまた歩を進める。丸屋が席について、頬杖をつくとき皆は何もなかったみたいにざわざわと騒がしさが戻ってくる。ヒロミは席をたち、しりもちをついたままの俺の横にしゃがんだ。

「あんま手、出さないほうがいいんじゃない」

「けど、俺」

「うん、たぶんオケは間違っていないけど。あんま関わらないほうがいいんじゃないって」

下から見上げる、少し離れたところに座る丸屋はまったく別世界にいるようで、夏の日差しにその髪の毛がきらきらと輝いていた。

「丸屋」

もう夕方五時を回っていたのに、教室の中は妙に明るかった。電灯はついていない。冷房はさっき切れた。五時をすぎると学校中のクーラーは切れる。五時になったら帰ろうと思っていたが、帰ろうというそのタイミングに丸屋が帰ってきた。おそらく欠席日数の数と、特別補習のことで呼び出しをくらってるんじゃないか、と三時までには一緒に待っていてくれたヒロミがそう言っていた。

「かばん、家まで持つ」

その申し出は宙に浮いたままだ。丸屋はそれを無視して、松葉杖を机にたてかけるとかばんを肩からかけ、また松葉杖をもって教室を出て行く。その背中にはかすかに汗のあとがにじんでいた。夏の熱気は毎年毎年強くなるようだ。さっき切れたばかりの冷気に打ち勝って、熱気が教室内に充満しようとしていた。廊下に出る。もっと手ごわい熱気が渦巻いていた。蝉がはじけたように鳴きだす。

丸屋の後姿がゆっくり遠ざかっている。廊下は古い正方形のタイルが敷き詰められていて、すべりやすい。不安に思いながら、追いかける。そのとき、カシャーン、と高い音がしてつづいて、低いうめき声みたいな声が聞こえた。

丸屋が転んだんだ。

「大丈夫か？」

半ば滑り込むみたいにそばによる。ひざを打ちつけたらしく、暑さからの汗というよりも痛さからの汗をかいているみたいだった。冷えていたからだもすぐに熱を持つ。

「ひざ、打ったんだろ。いいよ、本当俺かばん持つし、それぐらいさせろって」

かばんを半ば奪い取ったが、丸屋は反抗もせずに松葉杖を拾った。立ち上がるのに腕をかすと、素直につかまる。ゆっくりと階段をおりて、学校を出た。

ようやく日が傾いてきて、若干空気が涼しくなってきたがやはりアスファルトにこもった熱が汗を呼ぶ。蝉も鳴き続けていて耳が痛くなるほどだった。俺はかごに丸屋のかばんをいれて、自転車をひきながら丸屋の歩調に合わせて歩いた。

学校の前の道を通り、生徒の大多数が使う最寄の駅とは反対方向の、田んぼや畑だとか、ずいぶん緑の多い平地を歩いていた。駅前には本屋とかCDショップだとかが多くてよく友達とも行くのだが、こっちにきたことはなかった。たぶん俺の家は、駅と丸屋の家のちょうど真ん中にあるのだろうとぼんやり思った。

丸屋は俺の横を黙々と歩いていている。汗をぬぐうことはできないのだろう、オレンジ色の髪の毛が汗を吸い、額にべたりと張り付いていた。不思議と不快なようには見えなかった。

「お前、本当にうちまで来る気か？」

丸屋は立ち止まり、何うようにこちらを見た。前髪が汗で固まっているせいでか、斜めにわか

れているその間から両目がはっきりとこちらを見ていた。変に力のある目だ。ヒロミの目はぱっちりとして、かわいいと密かに思っているし力があると思う。だけど、丸屋はその比じゃない。どきりとしている自分が気持ち悪い。

「かばん、もっていくって言ってるだろ」

「……俺と一緒にいると、色々まずいんじゃない。せんせーたちはいい顔しねえだろうな」

「俺がそんな良い子だって言うのか？」

「あ？」

一瞬きょとんとした丸屋は、はじけたように笑い出した。蝉とのコラボレーション。四方が田んぼのこの場所で、笑い声はよく響いた。

「人のこと自転車で轢くといひ何言ってるんだよ、ばかじゃねえの」

「うるせえよ」

声がひざに響くといいながらも、丸屋は笑っている。少しほっとして、丸屋の笑いにつられて俺も少し笑った。

「でも」

彼は杖を脇に挟み、腕をのばすとかばんをとった。

「家まではいい。ここからは、近いから」

「けど」

「いって言ってんだろ。桶川ってけっこう面白いのな」

「お前が勝手に笑っただけだ」

丸屋はまだ笑っている。あまり納得はいかなかったが、田んぼのあぜ道の真ん中で携帯の番号を交換して、別れた。

普段、教室にほとんどいない丸屋のオレンジ頭を、夏休みになってから校舎で頻繁に見かけるようになった。というか、目にすぐに入るようになったとでも言うべきだろうか。彼は出席日数が足りないばかりに、ほとんど全ての補習授業をとらなければいけないようだった。強制的に最低三つを取らなければならない授業で、俺は古典と歴史と数学をとって、その三つともが丸屋と重なっていた。教室移動をすると、すぐに目に入るオレンジ頭。もしあの事故がなかったら、彼がいることを確認していただければよかったが、今の俺は違う。

「丸屋、おはよ」

「ああ」

丸屋は相変わらず長い前髪の少しのすきまから目を覗かせて、小さく頷いた。彼の足はいまだ包帯は巻かれているし、松葉杖も手放せない。俺はできるだけ彼のかばんを持つようにしているし、家まで送るようにもしている。とはいえ、いつもいつもあの田んぼのど真ん中で別れるのだけど。それに彼は俺に黙って帰ってしまうときが多々あった。

「今日も、暑いな」

「足が腐る」

「冗談に聞こえないから、やめろって」

咽喉を詰まらせたみたいに、くっくく、と丸屋は笑う。みんな腫れ物みたいに彼をあつかうが、実際はそんなこともないし、彼が秀才だといううわさは本当のようで、補習中にわからないことを聞くと、難なく答えてくれる。なぜ頭をそんな色に染めているのか、と聞いたところ、「あんまり人と話すのがすきじゃないんだ。こんな頭してりゃ、誰もよってこねえと思ってさ。バカはバカで、たむろしてっけどな」

そう言って、めんどくせ、と丸屋は笑った。

校内にも「不良」と呼ばれる素行の悪い奴らはいたが、確かに彼はそういう奴らとも距離を置いているようにも見えるし、実際わからないものだと思う。ただ、べったりした関係よりも、そういうやつらのほうがさっぱりと好き勝手できるから、まだ付き合いはもてる、とも彼は言う。その話をヒロミにしてやると、

「オケ、いつのまに仲良くなっちゃってんの？」

と怪訝そうに眉間にしわを寄せた。

「うらやましいのか？」

「違う。へんなことに巻き込まれないようにね、なんか怪しい」

と、高校生らしからぬ顔をしてみせた。頭をぼんぼんと叩いてやると、もう、とため息まじりに苦笑していた。

丸屋からの電話が入ったのは、前期の補習が終わった日の夕方だった。荒い息の向こうで、彼の苦しげな声が聞こえる。

「悪い、桶川、きてくれないか」

「え？どうした？気分悪いのか？」

「いや、いつもの田んぼでこけたんだ。ひざ打ちちまって、立てない」

俺はまだ学校の教室にいて、残ってた数人で話をしている途中だったが一もちろんヒロミもいた一打ち切って校舎から出て、自転車に飛び乗った。七月も終わりに近づいている夕方だが、蝉は相変わらずせわしくなっているし日中の熱を吸い込んだアルファルトはあつい。汗をかいている。生え際から、脇から、背中から、とにかく毛穴から。風は蒸してはいるが、やはりこれだけの勢いでうけると気持ちが良い。

すぐに背の高い建物は流れていき、最近見慣れた田んぼの道に出る。まっすぐ、まっすぐ、とにかくまっすぐだ。少しして、道にうずくまる影を見つけた。自転車を下りて、引きながら近づいていく。気配に気づいたのだろう。丸屋はゆっくりと顔をあげた。冷や汗か、暑さゆえの汗か、とにかくびしょりと濡れた前髪からのぞく二つの目が俺をとらえている。妙にドキドキする。たぶん、彼の目には力があるはずだ。それはきっと、ヒロミやほかの女子が化粧をしてつける眼力じゃなく、彼そのものに備わっている、そういう強さみたいなものか。

「大丈夫か」

自転車のストッパーをたて、かけよる。彼が使っている肩掛けかばんは、少し遠くに転がっており中身が少し出ていた。松葉杖もそのまま放置されていて、そもそも丸屋はこけてから座るのが精一杯だったのだろう、足を投げ出して座っている。

「悪い、拾ってくれ。そんで肩かして」

言われたとおりにして、肩を貸す。足に力が入らないらしく、抱きかかえる格好になった。ゆっくりと気を使ったつもりだったがそれでも、丸屋は立ちあがるときに低くうめいた。

「後ろ乗れよ。家まで送るから、道教えろって。ていうか送るっていつも言ってんだし黙って帰るなよ」

「いい」

「よくない。起きれなかった奴がつべこべ言うな」

きつといつもならもっと反論したのだろうが、今日は足の痛みを負けたのだろう。丸屋はおとなしく自転車の後ろの荷台に腰かけ、松葉杖を持った。俺は彼のかばんを背負い一かごには俺の荷物が入っている一、ペダルを踏んだ。

本当にすぐ近くにあった丸屋の家は、自転車で五分もかからなかった。それでも男の二人乗りはけっこう辛い。汗をかなりかいた。後ろで道の指示を出していた丸屋は、俺とは正反対に涼しい顔をしている。痛みが引いたのだろう、ゆっくりと荷台からおりると松葉杖をついて家に向かう。

丸屋の家を見て、驚かなかったといえようそになるが、それを口にするほど俺もバカではない。

トタンとでも言うのだろうか、よくわからない材質の壁と屋根の、小さな平屋。ねずみ色に少し青色を混ぜたようなくすんだ色をしていて、真夏だということに見た目は妙に涼しい。周りにある家もほぼ同じ見た目で、そこだけがほかの町と切り離されたような集落に見える。植木鉢みた



いなものにわけのわからない植物を植えている家もあるし、犬小屋がある家もあるが、ひっそりとしていて本当に人が住んでいるのかわからない。

キョロキョロと見回していたが、ふと視線を感じて丸屋のほうをみた。彼は俺を待っているのだろう。こっちを見ている。

「少し、あがってけば。見た目どおりきたねえけど」

「あ、悪い」

否定はできないな、と思う。まるで小さな子どもが工作でつくったみたいな家いくつも、いくつも並んでいる。丸屋はそのうちの一つの前で待っている。俺は自転車を引いてゆっくりとそこに向かった。

ごちゃごちゃとした玄関にはかぞえきれないほどの靴が散らばっていた。子供用の運動靴も、女性用のヒールの高い靴も、そしてその上に今さっき丸屋が脱ぎ捨てたスニーカーがかさなる。入ってすぐ正面に仏壇があったが、扉はしまっていた。俺が靴を脱ぐのをためらっているのを察したのか、彼は松葉杖を器用につかっ、たたきに散らばる靴をばらばらと片側に固めた。そのスペースに靴を脱ぐ。

玄関に入って仏壇すれすれを右に曲がる。狭い。その言葉しか思い浮かばない。八畳あるかないかの居間にはほとんど隙間がなく、大半をおおきなちゃぶ台が陣取っていた。その上にも、床にもとにかくありとあらゆるものがちらばっている。絵本、ランドセル、エンピツ、食器、ごみ、雑誌、とにかくなんでも。隅に置かれたゴミ箱がひっくりかえっている。洗濯物にうもれてテレビがある。

ただ、これだけごちゃごちゃしているにもかかわらず室内はひっそりとしていて、暑いはずなのに静かに汗がひいていくような気がした。人特有のにおいはするが不快な感じはしなかった。丸屋は松葉杖を放り投げるとかばんもその上にのせた。ひざを気遣いながらゆっくり座る。俺が突っ立っているのを見上げている。

「汚くて悪い。たぶん、こんなスラムみたいなのに住んでるのマンガみたいだろ」

「いや……丸屋、俺どこに座ればいい？」

彼はふと、今まで見た中で一番やわらいだ表情だった気がする。どこでも自由に座ればいい、といわれたので床に散らばるいろんなモノたちをいくつかどけてみると意外にもあっけなく、古びた畳が顔を出した。

「兄ちゃん、帰ってきたの？」

不意に丸屋の後ろのふすまから声がして、小学生ぐらいの男の子と女の子が出てきた。すぐに兄弟なのだと察しがつく。二人がとても丸屋にそっくりだったからだ。目、が。二人は丸屋の顔をのぞきこみ、そして俺に視線を移す。会釈をすると、女の子の方はにこりと笑ったが男の子の方はすぐに目をそらしてしまった。

「お前ら、外で遊んでこれば。園子帰ってくるには時間あるし、夕飯もまだだろうから」

「うん」

女の子の方が返事をして、男の子を連れ出す。俺の後ろ一といたって何センチあるかないかの隙間を一を飛ぶように抜けると、玄関から出て行った。途中、どこに台所があるのかわからないが、女の子がコップと二つとペットボトルに入った麦茶を持ってきて、ちゃぶ台の上に積み重ねてあった雑誌の上に置いた。

「弟と、妹？」

「あ、うん。俺、一番上で三つ下の妹がいて、さっきのが六個下の妹。弟は八個」

「四人兄妹なんだな」

「まあな。桶川は？」

「俺は一人っ子だから。うらやましいよ、兄妹多いの」

「そうかな。園子……三つ下の妹だけど、あいつはいつも一人がいいって言ってる。いつも夕飯作るのは園子だから」

「そうか」

「うん」

部屋が静かになる。夕闇がせまってくる。どこかで犬が鳴いていた。丸屋がオレンジ色の髪の毛をかきあげる。俺は麦茶を飲む。なんともいえない空間で、俺だけが異物みたいな気がしてきた。麦茶はよく冷えていたが、なぜかコップが少し温かかったのですぐに生温くなる。

「俺、たぶん」

帰るよ、と言って立ち上がったときに丸屋はふと思い出したように言う。

「高校、卒業したら働くと思うんだ」

「兄妹、多いもんな」

「高校に行ってるのだって、ほとんど働くためだ。中卒なんて雇ってくれないしな。高卒だってどうかと思うけど、今は。けど、今は学校行ってるの楽しいと思う。桶川、いるしな」

暗い室内で、いつもわかりにくい丸屋の表情はもっとわからない。だが声からわかる彼の感情は、決して負ではないはずだ。

「愛の告白かよ、丸屋にモテてもなあ」

「ほざけよ」

丸屋がけたけた笑う。俺も笑って、家に向かった。

後期の夏休みの補習は益明けから始まった。が、丸屋がこない。後期の補習で彼と同じ科目は一つしかとっていなかったが、あのオレンジ頭がないのはどうも落ち着かない。ヒロミも同じ科目をとって、俺が丸屋のことに触れるとやはり怪訝な顔をして

「もともと、学校に来ないほうがふつうだったじゃん、丸屋くん。今ごろ遊んでるんじゃないの？」

と言う。

「お前な、言っているいいことと悪いことがあるよ」

と言い返したところ、彼女は不機嫌そうにため息をついただけだった。

その日、俺は補習が終わってすぐに丸屋の家に向かった。彼の家に向かうほど、蝉の声が遠くなっていく。かすかにミンミンゼミの鳴き声も混じっている気がする。夏ももう、終わってしまうのかもしれない。確かに、夕方になればなるほど涼しくなっている気がする。この時期にむしように切なくなってしまうのは俺だけだろうか。丸屋は、同じことを思うだろうか。学校にいる間、何度か連絡を試みたものの通じなかった。

足の具合も気になる。もうすぐ包帯もとれて、松葉杖なしでも歩けるはずだ。それなのになぜ学校に来ないのだろう。

俺は、丸屋と事故った日みたいに必死に自転車をこいでいる。

彼の家の前に自転車をとめたのは、空が薄紫色に染まる頃だった。生暖かいがそれでも、火照ったからだには涼しく感じられる風が吹く。一度深呼吸をしてから丸屋の家に向かった。チャイムなんてものはない。引き戸になっている玄関も、その奥の部屋も暗い。

戸をあけるとやはり大量の靴の山が目飛び込んでくる。松葉杖がおいてある。スニーカーもある。丸屋はたぶん、家にいるのだろう。

「こんにちは、桶川ですけど。丸屋、いる？」

「桶川か。ここの家に住んでるのはみんな丸屋だけだな」

丸屋の声だ。玄関から顔を覗かせて居間を見ると、布団を敷くスペースができていて、そこには丸屋が寝ていた。額にはタオルがのっている。

「お前、熱？」

「ああ、そうみたいだ」

靴を脱ぎ捨て、部屋にあがる。電気をつけてみたものの、どことなくまだ暗かった。丸屋の枕元に胡坐をかく。久しぶりに見た彼は少しやせたようではあったが、目の力はまだそこにある。

「いつから？」

「一昨日の晩ぐらい。急にでてきて、足も痛んでる」

「病院は？」

「いけてない。病院は嫌いなんだよ。うごけねえし、今」

タオルをのせているから、丸屋の額の生え際がよく見える。黒い毛がちらほらとのびていた。

「俺、自転車だし後ろ乗れよ。乗せてく」

「いいよ」

「よくない」

ぐずる丸屋を半ば強引に起こして、自転車の荷台に座らせた。きたときほどは飛ばせないが、めいっぱいペダルを踏み込んだ。いつのまにか日暮れも早くなっている。濃紺の空がせまってくるようだ。蝉の鳴き声が徐々に控えめに遠く、なっていく。田んぼの道は足に響くのか、熱のある頭にひびくのか、丸屋は始終、俺のわき腹あたりのシャツをぎゅっと握っていた。

結局、熱が出たのは本当に少しだけだが足の化膿した部分が原因だったらしい。毎日きれいなガーゼと包帯に交換して、丁寧に消毒をすれば痛みもひくし、熱もさがるだろうと医者に言われた。

「足、腐ってなくてよかったな」

「だな、ろくなことがねえよ」

帰り道はすっかり暗くなっていた。田んぼの道は一つも街灯がない。自転車の電灯だけがたよりだ。気分がよくなったのか、丸屋がふざけてからだを左右に揺らすからバランスがうまくとれない。俺たちは近所をはばかり理由もないので、大声で笑いながら道を蛇行運転する。初めてここを通ったとき、こんなにも涼しくなかった。こんなにも丸屋とは笑えてなかっただろう。

「なあ」

あの家の集まりの明かりがちらほらみえてきたとき、丸屋がぽつりと言った。続けて、止めろ、といったので素直に止める。キキッとブレーキがなく。彼は荷台からおりて、サドルにまたが

る俺の横に立った。暗闇の中でぼんやり浮かび上がる丸屋はまるで幽霊みたいで、今にも消えていくのではないかと思われるほどだった。オレンジ色の頭と、あの目だけが鮮明に思い出されるが、今俺の横にいる丸屋は何一つはっきりしない。確かに丸屋はそこにいるし、輪郭がぼやけているわけでもない。だけど、なぜだろう。とても不思議な感覚だった。

「あ、丸屋、お前歩けるじゃん」

「まあ、ちょっとふらふらするけど」

ひやりとしたものがハンドルを持つ手に触れる。いやに緩慢な動きだったが、それは丸屋の手だった。

汗ばんでいるのに、冷たい。

何？

聞き返そうと口を開いた瞬間だった。

丸屋の顔がこっちに近づく。あの目がこっちを見ている。

そう思った瞬間だ。

口と口が触れた。

違うな。

キスをした。

それは本当に一瞬のできごとで、だが何十秒にも思えたって、なんかどこかで読んだようなフレーズがぐるぐると頭をかけめぐっていた。けどたぶんそれは、一瞬のできごとじゃなくて、実際、何十秒であったはずだ。俺の手に置かれた丸屋の手に、力が入る。相変わらず冷たいが。

「な、おまえ」

ずっと冷静だった頭と、衝撃に打ちひしがれている体がつながった結果、俺は丸屋を突き飛ばし、その衝動でバランスを崩して自分も自転車と一緒にそこに倒れた。カゴに入れていたかばんが飛び出て、稲がそよぐ田に飛び込む音が鮮明にした。それほど辺りは静かだった。

「何……考えてんの？」

丸屋は答えない。彼は立ったまま、俺を見ている。まるで俺だけ突然こけて、ただ丸屋を攻め立てているようにしか思えない。が、確かに、唇と唇が触れ合った。生暖かく、少しカサついていた。生々しい感触。

「何、なんだよ」

心臓がやぶけそうなほど鼓動を打っていて、声もばかみたいに上ずっている。丸屋は目をそらし、ふらふらと歩いて闇に消えたと思うと、俺のかばんをひろいあげて戻ってきた。俺はよろよろと自転車にはさまれた足を抜き、自転車を起こしながら自分も立ち上がる。ぶつめたひざが痛かったが、それどころではなかった。丸屋は無言で俺のかばんをかごに入れる。

「桶川、さ」

不意に名前を呼ばれ、今度は何があるのかと身構えると彼は思いもよらず笑った。けれどその声は震えている。

「あの、なんだっけ。宇和島ヒロミ？のこと好き、なんだろ」

「なんで」

「見てりゃわかるよ」

ああ、とも、んん、とも曖昧な答えしか出なかった。何よりも今の、キスの、意味ばかりを頭の中で考えてしまっている。

ふと、また冷たいものが触れた。やっぱり丸屋の手だった。手の甲にすべての神経が集まる。体がこわばる。

「なんもしねえよ。びくってんなよ。じゃあ、俺帰るわ。ありがとな」

何かを答える前に、彼は去っていく。ふわりとかすかに汗のにおいがする。手が離れた。丸屋が遠ざかっていく。派手な髪の毛と、彼の着ている白いTシャツがぼんやりと、遠ざかっていくのを少し見送ってから、俺はUターンして自転車をこぎはじめた。

生温い風は、やはり気化熱を起こしてびっしょりと汗をかいて火照った体をジワジワと冷やしていく。

その後、丸屋は補習にもちゃんと来たとし出席日数も足りた。同じ科目をとっているときは、以前と同じように俺の隣に座った。おはようと言えばおはようと返す。気をつかっているのか俺の近くにヒロミがいるときは、近くにこない。目が合えば変な顔をして、笑わそうとする。けどたぶん、俺も丸屋も空回りを感じていたはずだ。だんだんと言葉を交わすことは少なくなり、なぜかヒロミが不安そうに俺を見た。そういう日が増えた。

俺たちは三年に進級した。

丸屋も、俺も、ヒロミも別のクラスになった。ヒロミとは相変わらず廊下で会えばくだらなく話したが、丸屋とはまったく疎遠になった。オレンジ色の頭が視界にはいっても、できるだけ目では追わないようにした。もう、どうしていいのかもわからなかった。あの、キスの、夜から丸屋から積極的に接触もなく、俺は悶々としたままで、だからといって彼の気持ちを理解できるわけでもない。

何を言えばいいのか、何を答えていいのか。俺には何も、わからないんだ。

あの出来事はなかったことになっているのなら、もう、それでいい。あの目に、俺を見つめたあの目に、どんな思いがあったのか、知らなくて、いい。

高校を卒業し、地元の大学に進学。大学も無事に卒業し、地元の企業に就職してからもう六年がたった。

この春に社内の異動があって、俺は変わらなかったが周りの人間が何人か入れ替わった。事務員のおばさんが若い女の子に変わるそうっすよ、と隣のデスクの平松が嬉しそうに話していたのは、昨日の話だ。今日はその女の子を含め、配属されたのがくるはずで夜は歓迎飲みをすとかいっていた。夜にふらふらするのはあまり好きじゃなかったが、付き合いならばしょうがない。

朝のミーティングが終わり、しばらくしてから何人か見知らぬ顔がやってきて、課長のデスクの前に並ぶ。そして課長がパン、と一回手を叩いた。

「彼らが今日から新しくここに入る。やりやすくしてやってくれよ」

そういわれると、彼らはペコリとお辞儀をした。まだ入って二年たったかたたないかぐらいなのだろう、動きにはまだ若干のぎこちなさが残る。平松がイスに座ったままからからとこっちにやってくる。

「ほら、あの子ですよ。あの子。一番はしっこの。ああ、ここの島の事務員になってくんねえかな」

「なるだろ？ここの島の事務員のおばちゃんがいなくなったんだから」

「ですよ、俺がんばっちゃお。あの子なかなかかわいっすよ」

「仕事場でサカるな」

平松は鼻の頭にくしゃっとしわを寄せて笑う。人懐っこい笑顔だ。だから憎めない。からからと自分のデスクに戻った平松を確認して、自分のデスクに移動する、新しい事務員の女性を見る

。童顔なのか、ずいぶん若く見えた。こげ茶色の髪の毛を後ろで一つに結わえている。首が白く、細い。

彼女は自分の荷物の入ったダンボールをかかえて、やはり俺たちの島にやってきて以前いたおばちゃん事務員のデスクに荷物を置く。その一連の行動を見ていたのがばれたのか、彼女は俺のほうを見た。がっちり目が合う。

はっとした。まるでどこかで見たことのある目だ。違う、見られたことのある目だ。ああ。思い出した。

高校の、あのときの、丸屋の目だ。何が、と言えれば答えられない。ただ、変に力のある目だった。

「ども、この島の一員の平松です」

六つのデスクが三つずつ向かい合うようにくっついて、一つの“島”と呼んでいる。六人のうち一人は事務員で、島の中で領収書やコピーの世話などをする。ほか五人は外回りに行ったり内勤だったり、けっこうハードなスケジュールのときもある。それでもこの仕事を続けられたのはこの島制度（小学校の頃の班みたいなものだが）の中で育つ連帯感だったり、自分の役割だたりを感じられるからだ。とくにこの平松は、ムードメーカーで、何かとくるくるよく動いてくれる。新入りに真っ先に挨拶したのも、やはり彼だった。

なぜかドキドキとしている俺をよそに、彼女は差し出された平松の手をやわらかく握り、優しく微笑んだ。

「はじめまして、丸屋園子です」

彼女は、啞然としている俺を一瞥した気がしないでもなかったが、わからない。

その夜、課での歓迎飲みがあり、二次会は島別に行われることになった。俺たちの島の幹事はもちろん平松で、彼は予約をしてあった居酒屋に俺たちを案内する。丸屋さんは始終にこにこしていて、平松のくだらない話にもよくけらけらと声をあげて笑った。雰囲気はいい。ただたぶん、俺だけが彼女と目が合うたびに緊張していたろう。ほかの面子は彼女に話しかけ、仲良さげにはなしている。ふと、二次会の店に入る前、扉をあけたまま人数を確認していた平松が、最後に入った俺の耳元で言う。

「どうしたんすか、桶川さん。今日はいつにもましてなんかクールで」

「いつもだよ」

「けど、珍しいっすね。新しい人はいってくると、桶川さん色々面倒みてあげてんのに」

「お前がいるからな」

「ほめ言葉っすか」

平松は笑い、店に入る。

俺たち六人は座敷に通され、三人ずつで向かい合って座る。せっかくだし、とオフィスと同じデスクの配置で座ることになった。俺と彼女は対角線上で、一番遠い。心なしかほっとして座る。

一次会ではそこまで飲まなかったからか、みながけっこうな勢いで酒を口にしていた。寝てい



る奴もいる。そこまで酒には強くないので、俺はジョッキを少しずつ口にしながら、皆の話に耳をかたむけ相槌をうっていた。

どのくらい経ったろう、しだいに勢いは消えまどろんだ空気になる。最初の席から各自好きに動いて、俺だけがかかわらずその場所にいた。つまみの枝豆を食べながら、皆の帰路をどうやって確保しようとぼんやり考えていたときだった。

「あの」

顔をあげると、本当は同期の古賀が座っていた場所に丸屋さんが座っていた。予想外のことで、がっかりと目があってしまった。ぼんやりとしたオレンジ色のやわらかい照明の下、彼女の髪の毛は昼間見たよりも明るい色に見える。あの、丸屋のオレンジ色の髪を思い出す。今もまだ、あの髪の色をしているのだろうか。さすがにそれはないか。

「桶川、さんですよ」

「あ、うん。どうかした？」

「いえ。今日あんまり話してないなあって思って」

ふっと微笑んだ。目じりに若々しいしわが寄るのが、かわいらしい。どっと笑い声が上がって、二人してそちらを見ると平松がまたくだらないネタなんかを見せていて、眠っていたやつも起きていて、俺たち二人以外がそこでなんだかんだと騒いでいた。丸屋さんに目を戻すと、彼女もこっちを見ていた。

「悪いね、バカばかりで」

「いいえ、すごく楽しくて。ほかの人みんないい方でよかったです。楽しくなりそう」

「まあ、そんな難しいことなんか何もなし。事務員は雑用ばかりで、嫌になるかもしれないけど、フォローはするよ」

「島長さん、なんですよ。桶川さん、若いのに」

「そんなことないよ」

島の責任者を「島長」と呼び、俺は二年前にその任についた。自己紹介のときにそう言ったのか、平松が言ったのかあまり定かではない。

「桶川さん、おいくつなんですか？」

「俺？あー……今年で二十九かな」

「そうなんですね。私、兄がいるんですけど、兄と同年です。三つ上の兄で」

俺の顔が引きつったのだろう、丸屋さんは少し驚いたような顔をした。はは、と笑っては見せたもののあまり効果がなかったようだ。

「どうか、されたんですか？」

「あ、いや……丸屋さんのお兄さんは……高校二年の夏に……足とか……怪我してなかった？」

彼女はビールを一口のみ、ジョッキをおいて、考えている様子だった。答えようと俺の顔を見、口を開いたときに、なんともまるで謀ったかのように平松が俺の首にからみついてくる。酔うとこうなるのが、たぶん、平松のよくないところだ。皆が笑っている。

「もー、桶川さん、丸屋さんを独り占めしちゃだめですよー」

「ああ、もう、お前、調子のんな。お開きだ、お開き」

「そんなー」

そうは言うものの、いい時間だったこともあり皆が立ち上がり思い思いに身支度を始める。俺は平松を立たせ、コートを持たせる。自分の分も持って、彼を外に促すのを装って座敷から出た。丸屋さんの方は見なかった。

もし、丸さんが、丸屋の妹だったからって俺に何かできるわけでもない。知ったところで、どうしようもない。彼女に取り持ってもらって、切れてしまった縁を取り戻そうとしたっていいだろう。だが、どうやってあいつのあの目を見ればいい。もう十年以上も経っているのに、こんな風にぎこちなく感じてしまう俺がバカなんだろうか。大学に入るとき、携帯を変えた。そのときに丸屋のアドレスは消してしまった。彼はあの後、俺に連絡を取ろうとしたことはあったのだろうか。結局進学はしなかったのか。就職したのか。きっと、あのまま、あの出来事がなかったらたぶん、俺たちは今も連絡をとりあってお互いの仕事はどうだとか、どんな子と結婚したいとか、そういうことを話しているはずだったのかもしれない。

きってしまったのは、丸屋か、俺か。

居酒屋を出ると、春とは言えずこし寒い風が心地よかった。各々が電車やバス、タクシーにのって帰っていく。俺は平松を支えて、全員が帰るのを見送る。飲みすぎたのか、平松は真っ赤な顔をして俺によりかかり半分寝ている。よくもまあ立って寝られるものだ。

「桶川さん」

振り返ると、丸さんが立っていた。白い春物のコートを着ている。繁華街の、ぼんやりとしたネオンの中で彼女だけは浮き上がっている。たぶん、きっと、絶対、丸屋の妹だと確信した。最後に二人乗りをした、あの夜に、去っていった丸屋も白いTシャツを着ていた。彼だけが浮き上がっていた。

「兄は、怪我してたのにすごく楽しそうでした。最初、学校に通うのも大変だと思ってたんですけど、桶川さんだったんですね、送っててくれたの」

「まあ、俺が怪我させちゃったからね」

「ありがとうございました。うち、父親いなくて、母もそんなに家にいなかったもので、やっとお礼が言えてよかったです」

「いえいえ、そんな」

寝ぼけた平松が謙遜している。丸さんはくすりと笑った。

「.....それで、丸屋は.....お兄さんは元気？」

「はい。この近くで働いていて、もうすぐ帰るといっているので、一緒に帰ろうかと思ってます。会っていただけますか？」

「いや、いいよ。こいつ、いるし...まだあそこに住んでるの？」

「さすがに、住んでません。それにあそこ一体、壊されてマンションが建ってるんです。今はこの沿線の駅前のマンションで、兄と私で暮らしてます」

「じゃあ、駅まで一緒に行くか？」

「いいですか？兄とは駅で待ち合わせなので」

彼女が隣にくる。お酒を飲んでいるはずなのに、そこまで酔っているようには見えなかった。

駅までの道で、ぽつりぽつりと話をした。主に、彼女の兄の話を。高校卒業後、どこに就職して、転職して、引越しをして。もうずっと会ってもいないし、一緒に過ごしたのはあの夏休みだけだというのに、俺の頭では同い年になった丸屋が容易に想像できた。たぶんそれは、彼女の横顔や話す雰囲気、彼にそっくりだったのもあるだろう。切ないほど、俺はあの頃にトリップしていた。

「お兄さんはさ」

兄を待つ、という彼女とやはり半分寝ている平松を駅の柱にもたれさせて、平松の分も切符を買い、また彼女の元に行く。

「まだ髪の毛、オレンジ色？」

「いえ、まさか」

彼女はけらけら笑う。

「高校を卒業する頃には髪の毛、黒くなってました」

「そうか」

「本当に、兄にあっていかれませんか？きっと喜ぶと思うんですけど」

いや、と手を振りながら平松を支える。まったく、酒臭い。

「まあ、また時間があれば今度は会いたいよ。丸屋によろしく伝えてくれ」

「はい」

平松は少し目が覚めたのか、もう大丈夫っす、とそれでもふわふわした調子で言うと俺から離れて一人で改札口を通過して階段を上っていく。俺も後に続こうとすると、彼女に腕を掴まれた。

「すいません、あの、少し私今でもわからないことがあって。あの頃、というか高校のときに仲良かったのは桶川さんなので、何か知ってるかなって思って」

丸屋さんは遠慮がちに、それでも兄ゆずりなのかそれとも親ゆずりなのか、そのしっかりした目で俺を見た。

「ぼんやりとしか覚えてないんですが、兄が泣いていた夜があるんです。夏休みで、いつだったかな、たぶん居間に布団が出ていたから兄が熱を出したときだったと思うんですけど。バカなことをしたって、ないてて、私初めて兄の泣いてるのを見て、覚えてるんです。もし、桶川さんが、あの、兄になにかされたのかなって思ったんですけど、喧嘩みたいなこと。それを知って、どうしようってわけでもないんですけど、もしそういうのが原因で、あの、兄に会えないのなら、すごく、申し訳ないって、私が言うことでもないと思うんですが、あの、すいません」

丸屋。

きったのは、俺だったのか。

丸屋さんは顔を真っ赤にして、自分が言っていることがわからなくなっているようで、それを恥じているのだろう。最後は照れたように、へへ、と笑った。

「園子」

彼女が振り向く。俺もそっちを見る。男が立っている。あの目で、立っている。

「お兄ちゃん」

丸屋さんが、今度は俺の顔を見た。微笑んでいる。

「兄、です」

俺は、どうすべきか逡巡し、自分でも驚くほど自然に笑顔になった。

「足、腐ってないか？久しぶり」

完